

平成24年度 第1回芦屋市地域福祉推進協議会会議録（要旨）

日 時	平成25年3月21日（木）午後3時30分～午後5時30分
会 場	芦屋市役所 分庁舎2階 大会議室
出席者	出席 会長 牧里 每治 宮崎 睦雄, 多田羅 猛, 仁科 睦美, 美濃 千里, 加納 多恵子 中野 久美子, 岩尾 實, 長田 貴, 松矢 欣哲 堺 敦, 仁木 義尚, 森川 太一郎, 菅野 勝利, 金山 良男 丹下 秀夫, 福島 貴美, 大上 勉, 寺本 慎児 事務局 地域福祉課 長岡 良徳, 細井 洋海, 竹迫 留利子, 吉川 里香, 小川 和真 社会福祉協議会 津田 和輝, 山岸 吉広, 宮平 太, 三芳 学 所管課 高年福祉課 奥村 享央 障害福祉課 余吾 康幸, 伊藤 浩一, 西川 隆士 こども課 池田 聡子 (敬称略)
会議の公表	<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 部分公開
傍聴者数	なし

1 開会

【委員会の成立について】

・開始時点で20人中17人の委員の出席により成立。

【委員会の傍聴について】

2 委員紹介

3 会長・副会長選出

会長…牧里委員

副会長…波多野委員

会長あいさつ

牧里会長：皆さんの豊富な経験と見識を余すところなくこの会議でいかしていただき、芦屋市の地域福祉が発展するよう協力していただきたいと思います。

今、働き方や暮らし方、情報の入手の仕方、生活の仕方がずいぶん変わってきています。家族の間でも、ここにいらっしゃる方には信じられないようなことばかり起きています。家族が保険をかけて命を奪う。虐待というのは私たちが見えないだけで、あちこちで起きているのではないかと思います。昔は就職したら一生勤めて、企業とともに我が家の暮らしがありました。しかし、そういった暮らしは現在一部の人にだけが描くものとなりました。かといって地域がその代わりになるかといったら、昔はちょっと困ったら醤油を貸してくれたり、奉仕団の活動があったり、火事はバケツリレーでなんとか消そうとしました。そういうものが見えなくなっています。地域がどこにいったか分からない。私たちが一番大事にすべきものは、「地域」をしっかりしたものにしなければなりません。一番怖いのは、いい人材が芦屋市から出て行くことです。出て行っても、いずれは芦屋に帰るといって人材を育てて、心をしっかり掴んでいないといけません。そのためのささやかな小さな取組ですが、今できることを一緒に考えていくことが大事だと思います。これまでも何度か出まし

たが、芦屋は田舎のようで都会，都会のようで田舎，そういういいものを持っています。しかし，それもほっておいたらなくなってしまいます。大事にしたいという人がいてこそ，それが続いています。ぜひともそういう観点から私たちは今，何をすべきかを一緒に議論していただきたいと思っています。開催にあたりましての挨拶とさせていただきます。

<資料の確認>

4 報告事項

(1) 芦屋市地域発信型ネットワークの活動状況について

地域福祉課 長岡課長より説明

①小地域ブロック連絡会の取組状況について

社会福祉協議会事務局宮平主任より説明

牧里会長：これまでのところで，ご質問やご意見を頂戴したいと思います。これではわかりにくいなど，何かありませんか？例えば地域発信型ネットワークなんて初めて聞いてわかりにくくはないですか。ないようでしたら私から申し上げます。

小地域ブロック連絡会の資料の1の2は，できたこと，できないこと，これから取り組めるのではないかということ，あるいは課題などが書かれていますが，これは地域ごとで書いていただいたものをまとめた資料ですね。今取り組んでいることで多少目立つのは浜風町の救急医療情報キットの配布，三条町で認知症サポーター養成講座を開催したとあります。そのほか，話し合いをしたなどの報告がいろいろありますが，実際に問題を解決したという報告はありませんか。

社協：その二つと，さらに裏も見えていただくと，防犯の推進のところで登下校の見守りがあります。これは話し合いをきっかけにできたことです。

牧里会長：高齢者が小学生の集団登校を見守っているということですね。帰りはどうしているのですか。

加納委員：行きは班登校をしており，帰りが見守りです。

牧里会長：だいたいその3点が普通の人にも何をやっているか理解しやすい取組ということですね。もうほかにはありませんか？

私の判断では，もう少しメニューが増えても良いのではないかと思います。あるいは同じメニューでも，例えば救急医療情報キット配布の取組も芦屋の全市に広げて良いのではないのでしょうか。一応実施プランなのでどう書くかにもよりますが，種類を増やしていこうという目標と，一つを全市的に広げていこうという目標があります。例えば一年目は3割まで，二年目は半分はやろう，三年目は9割までいこうという数値目標があるのが実施プランのイメージなのですが，そういう工夫ができるのではないかと思います。そうしないと皆さんも意見が言いにくいと思います。進んでいかなかったらその理由を聞くし，それをどうするか，なにか良い方法はないかと議論できますが，このままでは意見が出しにくいのではないかと思います。

事務局にお尋ねしますが，全般的に見て小地域ブロック連絡会の動きがゆっくりしているように感じる理由は，どこにあると考えていますか。例えば，今の委員に今以上に仕事が増えることは言いにくいとか，参加してくれる人が増えないといったことが考えられます。どこにでもある話ですが，若い人が入ってくれないとか，だんだんやる人が高齢化していて，体力的にも弱ってきて，歳を重ねると役が回ってきて地元ばかりと関わっていらなくなります。そのうち会議自体が問題解決力を失っていくというのが一般的に言われています。こういう議論をしていただく

と、この話し合いが実りあるものになっていくと思います。関係部局が集まっていますので、例えば相談の中で警察が踏み込んで良いのか、判断に迷うけれども、やっぱり問題があるケースや、なかなか手が出せないから、ここの部分は地域の人が取り組んでくれたら助かるとか、そういう話がしやすくなるということが、この会の趣旨と考えていただければと思います。事務局で補足することがありましたらどうぞ。

事務局（宮平）：では、資料3のところを見ていただけますでしょうか。後ほどプロジェクトのところの説明をすることになると思いますが、各会議体の関係図と課題をまとめたものですが、四角で囲まれたところがそれぞれの会議体になっていて、網掛けになっているところが課題になっています。右上に地区福祉委員会と小地域ブロック連絡会の関係と書いてあるところが小地域ブロック連絡会における課題と考えています。地区福祉委員会というのは社協が設置している委員会で、これも概ね小学校区ということで小地域ブロック連絡会のブロックと関係していますが、そこの関係の部分で参加している方もズレを感じています。事務局も地区福祉委員会と小地域ブロック連絡会の関係性については課題を感じています。

また、出席者の偏りについてですが、出席する人の固定化を問題に挙げております。ただ、地域全体の話をしようとすると自治会長に来てもらわないといけないということになり、町ごとでグループワークをするのですが、何かの役割をしている人が出席しないと困ることがあり、偏りや固定化という問題が生じます。出席者の温度差もあり、問題解決に至らないと同じことを何度も繰り返しているように感じてモチベーションの低下につながります。小地域ブロック連絡会の形が、例えば課題は上の会議にあげるという形をとっていますが、参加している行政の方に持ち帰ってもらって検討してもらおうという関係にはなっていないので、その部分での役割ができていないのが課題だと思っています。進みが遅い点に関しては、年に2回という回数の問題があると考えています。

牧里会長：説明いただきましたが、みなさんはどうお考えですか？

加納委員：この中で小地域ブロック連絡会に参加している人は少ないのでわからないと思います。民生委員はいろんなところに顔を出しますので、私も参加しています。出席者の固定化についてですが、参加してよかったと思えば何回でもやりたいと思います。それが何度出席しても同じような話の繰り返しになってしまっています。そして、地域の商店街とか社会資源をもっと活用して、見守り一つにしても小ブロックよりもっと小さい範囲、生活エリアの社会資源をもっと活用して発展させたいという段階に入ったばかりです。だから、牧里会長が思ってる以上に、ここに載せるほどの活動はまだできていません。福祉一辺倒の人は福祉のまじめな考え方で、自治会の人には自治会で何か楽しいことやゴミの捨て方、カラス撃退などの話題で、福祉の人間と話がかみ合いません。しかしどちらも生活の上では重要なことです。ではこの地域発信型ネットワークというのは福祉のためにできたのか、地域づくりのためなのかと、その辺でまだぐるぐる回っているのが現状だと思います。しかし、せっかく作られたこのシステム、体制はとてもいいと思うのでこれをなんとか現実の活動につなげていきたいと思っています。

牧里会長：虐待にしても引きこもりにしても認知症の高齢者の問題にしても身近な人が一番困ります。本人が相談に行く場合もあると思いますが、家族が市役所に行ってなんとかならないかとか、病院へ行って市役所など相談窓口を紹介されることが一般的です。場合によっては、地域の中で「あの家最近ゴミが溜まっているよね」、「民生委員に相談しよう」といって、民生委員を訪ねて行って、さらに行政が間に入った方が良いのではないかとつないでいきます。これがもう少し地域で見守ろうとなると、民生委員をサポートする住民が増えます。すると、そこで問題をある程度整理してから役所や病院、施設に相談を持ってくることになります。そこにはまれに非常によいのですが、しかし、福祉に世話になりたくないとか、訳あって地域に知られたくない、あるいは人に迷惑かけたくないという人もいます。また、家族もどんどん離れていって、家はぐちゃぐ

ちゃになっているようだが、逆恨みされても困るので住民が勝手に関わりにくいと感じることもあります。新聞配達員が配達に行くと、昨日から電気が付きっぱなしで心配はするけれども、それ以上は言えなかったということもあります。新聞が溜まってきて、何日かすると孤独死していたことがわかることがあるのです。あとき店長にひとこと言っておけばよかったと思っても、「私は新聞を配ることだけが仕事だから、そんな関係ない、仕事上立ち入ってはいけない」と思ってしまい、結局その後問題が発覚します。これは民生委員や地域、行政、専門家の仕事ではないかと思ってしまうのです。これは牛乳配達やガス会社にも起こりえます。問題を解決するルートとは山登りのようなものです。その登り方が芦屋市民の皆さんにどれだけ用意できているのでしょうか。ルートが少し狭いと感じれば、なぜ狭いのかを考えなければなりません。芦屋市の住民の皆さん、民生委員、ボランティア、皆さん一生懸命やっているのですが、その枠の外にいる人の関わり方を用意しておかないと、外にいる皆さんは基本的にはみんなバラバラでどうしていいかわからないものです。こういう状況が知らず知らずのうちに進行しています。今まではなぜ問題にならなかったのかというと、家族も地域もある程度まとまりがあったからです。だから、地域の役員をお願いしたら、その役員はだいたい地域のことは知っていました。しかし芦屋はどうでしょう。これだけ都市部で人口移動もあり、引越しや会社の転勤も多く、誰がいつ引っ越してきて、いつ引っ越して行ったかわからないという状況です。むしろずっとそこにいる人のほうが少ないと想定すると、そうでない人の掴み方ができていません。そこをどう掴むかということはこの小地域ブロック連絡会で議論しましょう。そういう人たちが寄ってきてくれるにはどうしたらいいのか、彼らの特性はどのようなものか調べたり、その人たちがどう思っているかを聞き取ったりしなければなりません。まず、若い人が多く、回覧板や新聞を読まず、インターネットで暮らしている人が増えています。仕事ではつながっているけど、地域ではつながる術もありません。こういう人たちを掴まないと、次の若い人をメンバーとして引き入れられません。いろいろ働きかけても断られます。なぜかという、地域の役員は荷が重過ぎるからです。もちろんその地域で仕事をしていたらやってくれるかもしれませんが、しかし、神戸や大阪への通勤で芦屋には寝に帰るだけという人も増えているのではないのでしょうか。では寝に帰るだけの人を掴むにはどうしたら良いのでしょうか。こういうことを皆さんに議論して欲しいわけです。そう見えていますといろいろなアイデアが出ます。例えば、地域の役員は嫌だけどお祭りの役員をお願いすると承諾してくれたりします。たとえば、ガンダムファンの多い40歳代の人に、ガンダムを自慢する会をしようといったら、これまで顔を出していなかった人が出てきたり、そのガンダムを使って子ども会を支援したりします。これが、結構楽しいので、お父さんが喜んで説明して、子どもも喜んで、今まで引きこもっていた子も出てきたりします。そういう何か限定したテーマで集めると人は集まりますが、役員や民生委員などをお願いすると断られてしまうことが多いです。

加納委員：芦屋はそんなことないです。もっと積極的です。祭りのだんじりでは若い人も多いです。

堺委員：この地域発信型ネットワーク図はいつ発行されましたか。これまでに何回課題が出てきて、課題解決のために会が何回開かれましたか。この会は、年に1回しか開かれていません。オーソリティばかり集まっているのだから課題解決の方法を持っています。しかし、あまりにも芦屋の全面的なところから集まっていますので、年に1回がいいか悪いかだけでも議論してください。

なぜこういうことを言うかという、地域主権改革で分権化されたときに芦屋市は自らやっていく権限が降りてきます。そういう時に、この2年間何をしていたのかと問われます。そういう認識が事務局や市にあるのかということです。そういう意味でこの図は社会的に捉えたらよく出来ていますが、これを課題解決につなげて欲しいのです。

したがって、この会議が年に1回ではもったいないと私は思います。この会議にはそれぞれの会の代表が出ていますので、それぞれの会では汗を流していますが、残念ながらこの会議は形式的になっています。ですからこの会議を年に何回開くのか、今日決めていただきたいと思います。先ほど社協から小地域ブロック連絡会が何回開かれたかという報告がありました。回数は少ない

ですが、しかし事務局はよくやっています。

牧里会長：堺委員がおっしゃりたいことと私が言いたいことが一致しているかわかりませんが、まさにその通りです。今は自治会に年間1千万円落とし、どう使うか決め、会計は不正なくしっかりする、そういう自治能力が必要な時代に入っています。今までのように行政から「これをやってください」ではないとなると、自治会にそういう能力がないと大変です。いま、その段階へきています。そういう話がどの程度行われているのかわかりませんが、そうだったら福祉の問題で地域のみなさんの力をつけましょうということを一番言いたかったのではないのでしょうか。それは1回限りでは議論できないのではないのでしょうか。必ずしも地域の人だけではないので、専門的な立場の方もどう協力するのも議論すべきです。会議を何回開催するのかというのは皆さんで持ち帰り検討していただきましょう。

堺委員：まだ報告が何件もあるのでしょう。まだ3分の1もいっていないでしょう。

牧里会長：とりあえず、ここまで対処法に関する意見が出たということで、次へいきましょう。小地域ブロック連絡会については根本的な問題解決を掘り下げてやっていかないと、同じことの繰り返しになって実りがない状況が続くということが共通理解できました。

事務局（細井）：先ほどから、小地域ブロック連絡会について成果があまり出ていないというご意見が出ていますが、決してそうではありません。事務局として先ほど社協の宮平さんから説明がありましたように、例えば、山手地区は今年度、活動や課題の共有に取り組んだという部分が非常に大きかったと思います。隣の町が何をやっているのかわからないということではいけないという機運が高まり、ゴミやカラスの問題についてはかなり共有されていて、どうしたらあの地区のように自分の地区もできるのかという共有ができていと理解しています。

それから精道中学校区や宮川・打出浜小学校区では、気になる人はどういう人かということを検討し、サービス提供がない時間を住民でどうやって見守っていったらいいか、精神疾患や認知症の疑いがある人にどう声をかけていったらいいのかということに精道の3つの小学校区域で取り組むことになっています。エリア意識がずいぶん高まってきたと理解していただければ良いと思います。また、資料1の2の中に、自治会に加入していない人、孤立している人はどう捉えているかとあります。例えば、資料1の2の「地域福祉への関心と理解を広げます」というカテゴリーの「今取り組んでいること・地域福祉の呼びかけ」のところで「自治会に加入していなかったり、地域と関わりの薄い世帯などにどうアプローチするかを他町の話などを聞きながら検討している」としているのが山手小学校区です。また「ニーズの気づき・発見」では「孤立している人の状況を把握したい」としているのが三条小学校区です。「地域で起きている事例を基に、早期発見の視点や地域できることの検討」は宮川・打出浜小学校区で取り組もうとされています。

このように、肩書きを持たない人への意識は非常に高まっています。やはり牧里会長もおっしゃったように、昨今の孤独死といわれる方、複合世帯であっても孤独死が起きていることについては、住民は危機感を持っていらっしゃいます。また「地域でのつながりづくり」では、潮芦屋という比較的新しい町でも、「地域の多くの人顔見知りになれるようなイベントの開催」ということに取り組んでいらっしゃいます。「地域にどんな人がいるか見えづらい」ということも書いてありますが、そういう意識を持って、社会福祉協議会が3年間事務局を務めたことで地域とよりつながりましたし、そういう意識や危機感を持って今後どうしていこうと考えていらっしゃいますので、25年度も引き続き、各地区エリアを越えて中学校区レベルで共有して、そのエリアで課題解決に向けて動いていくことになると思います。また、来年度の回数についても堺委員がご指摘されましたが、少なくとも2回以上は開催しようと思っています。どこかの段階で必ず経過をご報告させていただきます。

牧里会長：一つ注文があります。次回以降はできるだけ「見える形」にしたほうが良いと思います。行政と住民の協働チームを作った、事業者のネットワークを作った、あるいはプログラムでもい

と思います。子どもの見守りプログラムを作ったというような取組は見えやすいですよ。「意識が高まった」という表現だとなかなかわかりにくく、それ以上つつこみにくいのです。表記の仕方の問題ですが、プログラムなのかイベントなのか新しい組織なのか、このような表現だとトータルでどれくらいできたかということが外部に示しやすいと思います。これをもっとやろうと思うと担当職員が必要で、人件費が必要になります。また、これから自治会に自治機能を下ろしていくとなると丸投げで良いのかと不安になります。当然、間にコーディネーターのような役割をする行政職員が必要です。その人件費として捉えるように掛け合うと財政担当も考えてみようかなという気になるわけです。まだ先の話ですが、次を考えると、外に見える形にするには、どのような表記が良いのかなどの工夫をお願いしたいと思います。

事務局（細井）：わかりやすい資料づくりに努めます。

岩尾委員：自治会連合会の副会長として申し上げます。自治会で取り組むのは本当に身近な問題で、その解決で精一杯です。これは後ろ向きなことではなく、役員を引き受けていただける人がなかなか見つからないこと、また、どの地域にも当てはまるのかはわかりませんが、私の三条自治会では副会長の助けがありますが、何をやるにも自治会長がやらなければならないという雰囲気があります。自治会で地域福祉の問題に取り組む場合、特に高齢者の見守りについては専門的なことに関わりますので、地区の福祉推進委員や民生委員につなぐという役目を担っていると認識しています。しかし、それでは自治会の役目は果たせていないということで、小地域ブロック連絡会で自治会がどう関わっていくか、自治会の役目はどういうものを勉強していきたいと思えます。ただ、なかなか役目を背負っていただける方が見つからないという悩みがあります。自治会はこういうことはできないということを言いたいのではなく、現実的にこういった問題があるということをお願いしたいのです。今後は小地域ブロック連絡会の中で勉強し、自治会の中の細かい地域の方々の応援をいただき、福祉推進委員の方とも相談しながら、問題解決に前向きに取り組んでいきたいと思っています。

牧里会長：自治会も仕事が多すぎて限界がきていると思います。これ以上やろうと思ったら、本当は自治会に一人でもプロが必要です。会計をきちんとできて、事業計画も会長や副会長と話し合い予算要求をでき、予算に基づいて会計報告ができる人が必要とされる時代にきています。

加納委員：今まででしたら、実績があって、それに対して助成金が下りていたわけです。ところが、今は先に助成金を渡すから何かしなさいと言われる。私たち、まじめに福祉に取り組んでいる民生委員からすると信じられないような助成金の出し方をしているから余計にやりたくなくなります。これはおかしいと思います。実績があるから助成金をつけるというのが正しいと思います。

牧里会長：今後はそれが全体のやり方になると思います。だから住民の皆さんでお金を出し合って、職員を雇えば良いのです。

堺委員：この会議には芦屋の主だった、警察をはじめ、教委、民生委員などが集まっています。明るく会議を進めていくためにはお金の問題もさることながら、「見える化」が大事だと思います。今、国は無縁社会や生活困窮者が生活保護へ移行しないようにするにはどうするかという問題、防災対策などに力を入れています。それを自治会にお願いしたいといっています。そのスペシャリストたちがこういうことに取り組んだということ。「見える化」につなげてほしいのです。私たちには明日の芦屋を担うという役割がありますので、会議の進め方を「見える化」によって、よりよくできるのではないかと思います。確かにやっていることはやっていますが、明るい会議にするために「見える化」に取り組んで欲しいと思います。

牧里会長：最初に大きな課題が出てきましたが、これは次からもつながってくると思いますので、

次に移りたいと思います。

②ミニ地域ケア会議の取組状況について

社会福祉協議会事務局 宮平主任より説明

③地域ケアシステム検討委員会の取組状況について

社会福祉協議会事務局 山岸主任より説明

牧里会長：ご意見、ご質問などありませんでしょうか？

加納委員：やっと住民の話が出てきました。

堺委員：住民目線は大事ですが、誰が地域ケアシステム検討委員会に入ってきて、どういうことを課題解決に向けて取り組んでいくかということを事前にマーケティングしておかないと、住民が一から十まですべてやるのは大変です。したがって、住民は自治会などいろいろとつながっていて、広げるのは良いのですが、縮めるときが大変です。

牧里会長：もう少しゴールを明確にしたほうが良いと思います。ケースの研究会もやっておられるようですが、そのケースにどう住民が関わっているのか、ただ通報するだけなのか、その後もボランティアとして関わってくれているとか、病院へ運ばれた後、見守りをするなど関わり方はいろいろあります。住民が果たす役割、専門機関が関わる場合、行政が全体を見て関わる役割もあるし、ケースによってずいぶん違うと思います。

例えば、ゴミ屋敷の場合はゴミの清掃のほか、財産があれば司法書士に管理してもらわなければなりません、民間なのでどうやって関わってもらうかなど、そういう仕組みづくりならわかりやすいですが、「仕組みを作らなければ」だけでは見えにくいです。事例研究会は重ねていたでいいですが、そこにはやはり一定の目線というか、住民がやるべきことやできること、行政がやるべきこと、専門機関がやるべきこと、それ以外の事業者がやるべきこと、できることを検討し、その結果、どうできたのかできなかったのか、またはできる可能性があるのかを考える必要があると思います。

事業者も業種によっては暮らしに結びついているのだから、少しボランティア目線で関わってくれるだけで話が全く違います。こういったいくつかの関わり方のパターンがあります。もちろんできないこともあります、行政と事業者が協力し合えるための工夫などを検討することはできます。生活保護を受けているが、若干小銭が入るような仕事の仕方というのはあるわけです。すると本人も頑張ろうという気になる。例えば芦屋の公園を掃除して手当てが出るとしたら、芦屋の生活を下支えしているというプライドができます。もともとは同じ税金です。生活保護で出るのか、手当てとして出るのか、出方が違うだけです。そう考えると地方自治体のほうが、それを巧みに利用するにはどうしたら良いのか知恵を絞らなければなりません。例えば芦屋川のケーキ屋で手間仕事がないとか、そういう仕事づくりをこれからは社協もやらなければならない時代が来たのです。つまり、何が必要で何ができるのかということをお互いに出し合わない、せっかく集まっても責任のなすりつけ合いになってしまいます。そういった中で、いろいろな知恵を絞って考えるわけです。そういうことをこの検討委員会で検討しようということであれば、みんな一生懸命やるのではないのでしょうか。

時間も迫ってまいりました。ほかにご意見ある方いらっしゃいますか。

ないようですので次に移ります。

④各附属機関担当課からの報告

・ 地域包括支援センター運営協議会について

高年福祉課（介護保険担当）奥村課長より説明

- ・ **地域密着型サービス運営委員会について**
高年福祉課（介護保険担当）奥村課長より説明
- ・ **地域自立支援協議会について**
障害福祉課 西川主査より説明
- ・ **要保護児童対策地域協議会について**
こども課 池田主査より説明
- ・ **権利擁護支援システム推進委員会について**
地域福祉課（トータルサポート担当）吉川主査より説明

牧里会長：これまでの説明で、何かご意見ございますか？

福島委員：芦屋市では市内全域の 81 の自治会が集まって、芦屋市自治会連合会を組織し、そこで地域の課題解決を行っております。毎年周辺の自治会や全体で話し合い、11月の街づくり懇談会では、市長や庁議メンバーがすべて集まり地域の課題解決に向けて話し合っております。先ほど話が出ましたカラスの問題はそこで課題が出ましたので、市民参画課が主催し、自治会連合会とともに専門家を呼び、カラスの生態を学び、ゴミ問題の課題を解決に向けた講座を行い、解決を見いだしています。ただ、芦屋からカラスを追い払っても他市の迷惑になるだけですので、共存するという形での解決です。そこで解決できなければ兵庫県の連合自治会に上げ、そこでも無理なら全国自治会連合会にという形で課題解決をしています。役員についての話も出ましたが、役員の育成のために、地域のボランティアコーディネーター養成講座を継続して行っております。

また、三役会の中で役員が生まれなければ、世帯単位でやってみてはどうかと提案したり、婦人部や青年部を作るという形で新しい知恵を入れるのはどうかという提案も出たりしています。全体的に NPO を入れて新しい課題解決の仕組みをつくるということも今年度考え、全体に図ることにしております。

牧里会長：市行政全体と地域福祉を中心とした計画推進の関わりの部分で一つ事例を紹介したいと思えます。ゴミ屋敷の問題ですが、多くの場合は外国人と認知症の人たちです。

芦屋はどうかのかわかりませんが、多くのところでは、細かい分別が必要です。するとわからなくなり、わからないから分別せずにゴミを出すと、近所の人から文句を言われ、怖くなってゴミを溜め込む人が増えるわけです。ようするに、全体の問題と個別の問題の両方に配慮しないと、そういう人が増えています。一人暮らしで認知症の場合、分別してくれる家族がいませんし、外国人はそもそも分別をやったことがないという人もいます。そういう全体の課題と個別の課題をどこかですり合わせて考えないといけない時代になっています。それをやらないと多くの地区や協議会は、福祉の問題が抜け落ちます。障害者や高齢者の問題については、これは行政がやることだと思ってしまう。別々で来ていた予算も一緒に来ていますから、福祉の予算がそっちにいつてしまい、こっちがどんどん悪くなっています。ということは、自治会が広い問題と、個別に起きている問題を常に意識して二つの目線で複眼的に見る必要がある時代に来ているということです。今までは「積み上げ」でできたが、今は「相乗り」というやり方でやらなければならないとなったということです。ぜひとも関心を持っていただいて、よろしくお願ひしたいと思えます。

福島委員：そのゴミ屋敷というのは自治会連合会と環境衛生協会がつくっている会で、実際に見に行きましたし、環境課と市民参画課でどのように解決していくかというのをそれぞれの団体のトップの方とともに話し合い、課題解決の方向へ向かっています。

牧里会長：ぜひともそういった発信をよろしくお願ひします。

大上委員：防災安全課より申し上げます。災害時の対応は要援護者だけでなく、広く大きな国を挙げての問題になっています。一方、防災所管課では防犯と防災のそれぞれで地域、自治会を始め、自主防災会や自主防災会の連絡協議会という集合母体があり、よく似ているというか、福祉のこういうネットワークを見本にしながら進めていかなければならないことが多々あります。この場でご指摘いただいたように、「自助」や「共助」という言葉を安易に行政が使い、更に地域に役割だけを「命を守るためだ」とお願いするのが無理なのは日ごろの細かい地域の活動に関わっているので重々理解しています。とはいえ、事前配布資料を見ていましたが、お金が付くとか組織作りということだけに目を奪われるのではなく、防災対策について「地域の活動母体が限界です」というところこそ「防災対策をみんなで考えましょう」とか「簡単なことでも参加できることがありますよ」という切り口で提案すると、地域の活動の活性化とかネットワークの強化に使ってもらえるネタになるのではないかと考えております。私たちがいくら体を動かしても皆さんが培ってこられた地域の情報や福祉の専門的なスキルというのは到底立ち及びませんので、やはり連携や調整が大事になります。行政は行政で審査会を通し、名簿の会議等の一つ一つ手間をかけながら進んでおります。地域の個々の見守りの支援体制についてはご説明もしますし、ご協力もいただかないといけませんので、ぜひよろしくお願いいたします。

別立てでいろんな組織を作るよりもこういったネットワークを活かして、どの段階のどこへ説明すれば一番広がるのかということを考えながら参加させていただいておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。

牧里会長：ありがとうございます。防災の観点からもご意見いただきました。地域福祉の取組では、行政の縦割りが横にうまく連携して機能していくにはどうしたらいいかというのが一つのポイントです。もう一つのポイントとして、これまでは市民と行政が分担し合う、住み分けるといのが多かったのが、これからはお互いが相乗りするにはどうしたらいいかを考える場とさせていただければと思います。そうすると、これからの自治のあり方が見えてきます。例えば、防災だけでは限界があります。しかし日々の暮らしの中で助け合ったりしていれば、住民が助け合って避難もするし、防災支援活動もします。丹後方面では、「古民家を防災の避難所にするから都市部の人に手を挙げてくれませんか」というおもしろい取組があります。なかなか反応はありませんが、考えてみたら防災を楽しむことができます。避難訓練というと防災グッズを持っていかなければならないとか、消火活動しなければならぬと考えがちですが、みんなでツアー組んで行きましょうというようなつながりができると、支援物資よりも何倍も役に立つし、古民家がある限界集落に人が来るから助かるわけです。そういうことを考えなければならぬ時代なのではないかということです。内にこもって考えるのではなく、どう連携して自分のところが豊かになるかということです。縦割りで防災だけ、都市計画だけ、自治会だけ、福祉だけというのではなく、どうつないだらみんなが楽しんで結果として自治力が付くかを考える場にしていただければ良いのではないのでしょうか。それが1回では少なすぎると堺委員に怒られました。楽しければ集まろうという気になります。そういったことで、来年度の協議会も実りあるものにしていただきますようお願いいたします。本日は、これにて閉会します。